

選考をふりかえって

「小説部門」中学生の部 選考長 林 真理子

最優秀賞の佐藤るりかさんの「不器用」には驚いてしまいました。人を殴ることに快感をおぼえる少女と、恋人のDVに苦しむ女性との、ひとときの出会いを描いたものですが、これはもう大人の小説家が「少女」を描くレベルではありませんか。佐藤さんの作家としての観察と目配りはお母さんの方にもいき、祖母の介護に疲れている内面を指摘しているのです。

「私はまだ無知な子供で許されるから」という言葉は、本当の子どもがつくり出せるものではありません。そして佐藤さんはもう自分の文体を持っています。リズムがあり、会話とのバランスがとていい。どうかこれからも小説を書き続けてください。大人になった佐藤さんの書いたものをぜひ読んでみたいですよ。

ところで今回の応募作の中には、「過去を変えたい」というものがいくつもありました。まだほんの少ししか生きていない皆さんですが、後悔というものを知っているんです。そしてその後悔が、どれほどつらく悲しいものかということ。百木優理亜さんのこの悲しみにきちんと立ち向かおうというラストに、とても好感を持ちました。

宮村蒔恵さんの「蒼い蛍」は、友情と死を描いたものです。ちょっとありがちな、センチメンタルな題材を、きちんとした作品にしたのは「知ってしまっただけ」大きさを発見したこと。友達が出来て毎日が楽しくて、大切な人も手に入れた。そんな幸せを知ってしまったら、死んでいくことがどれほどつらいか、という親友の言葉に胸をうたれました。そして宮村さんも百木さんも、お祖父さんの死がからんできますが、おそらくお祖父さん、お祖母さんとお別れが、中学生の皆さんにとっては大きな出来ごとなのでしょう。初めての死に向かう経験が、皆さんに人生を考えさせ、創作に向かわせたかと思うと、感慨深いものがあります。こうして祖父母は孫に重要なものを与えていくのですね。